

新 刊 紹 介

新
刊
紹
介

1. 御成敗式目ハンドブック

日本史史料研究会監修 神野潔・佐藤雄基編

2. ヨーロッパ史——拡大と統合の力学——

(岩波新書 2003)

大月康弘著

3. 講義 ウクライナの歴史

黛秋津編

日本史史料研究会監修

神野潔・佐藤雄基編

『御成敗式目ハンドブック』

吉川弘文館 二〇二四・二刊

四六 三二六頁 二二〇〇円

御成敗式目(以下、式目)は、その有名な故に研究が膨大で論点も多岐にわたる。また「悪文」とも評される法文の難解さが、その初学を容易ならざるものになっている。

本書はかかる現状に答え、式目の「コンメンタール」(注釈書)たらんことを志向した概説書である。執筆陣は、編者である神野潔・佐藤雄基をはじめ、法学系・文学系双方から集う日本中世前期法制史研究者を中心としている。

本書の構成を示す(括弧内は執筆著者、矢印先は担当の式目条文、序・あとがき省略)。

総論 御成敗式目とは何か

一 御成敗式目の制定過程とその目的(神野) / 二 御成敗式目と鎌倉幕府法の構造(佐藤) / 三 御成敗式目の受容史・研究史(佐藤) / コラム 「抄物」には何が書かれていたのか(佐藤)

七八(三三)

第I部 御成敗式目から見る権力のかたち

イントロダクション(佐藤) / 一 守護と地頭(佐藤) ↓三〇五条 / 二 権門と法團(黒瀬にな) ↓六・三十・四十七条 / 三 不易法(下村周太郎) ↓七条 / コラム① 御成敗式目四十二条の法的位置(木村茂光) ↓四十二条 / コラム② 御成敗式目一・二条を仏教思想から考える(生駒哲郎) ↓一・二条

第II部 中世の人びとは何を争ったのか
イントロダクション(神野) / 一 罪と罰(渡邊俊) ↓九〇十五・三十二〇三十四条 / 二 悔返と未処分(神野) ↓十八・二十・二十六・二十七条 / コラム 密懐と辻捕(野村育世) ↓三十四条

第III部 どのように裁判を行ったのか
イントロダクション(佐藤) / 一 召文違背の咎(工藤祐二) ↓三十五条 / 二 問状と裁判手続(木下竜馬) ↓五十一條 / コラム 和与をめぐる理解の現状(西村安博)
附録 「御成敗式目」現代語訳
如上の構成に現れるように、本書ではま

ず総論にて、式目全体に関する諸論点が示される。その中で、「原式目」論や式目「追加」の実態などの著名な学説・論争が、参考文献とともにわかりやすく示されるのは貴重であろう。また各論では、守護・地頭の権限・管轄（第一部一）や問状文言の変化（第三部二）など、研究史上重要な論点を生んできた条文が個別に取り上げられ、式目、ひいては鎌倉幕府訴訟の研究史について、この一冊であらましを把握できるようになっている。

一方で、本書は執筆者各氏による最新見解の提示も両立させており、該分野の研究者にとっても示唆に富む。とりわけ、総論三にて佐藤が、（式目の運用場面たる鎌倉幕府訴訟の場において）訴訟当事者の動きと幕府側の志向が如何に相互作用したのかについての関心が高まるという、近年、そしてこれからの研究潮流を看破している点は重要であろう。

これについては、本書内の複数の章で、「訴訟当事者の視点」を意識した記述がなされている。本書第一部三で下村が紹介した、当事者による式目七条の拡大解釈や、

第三部一で工藤が重視する、当事者による「召文遺背の咎」適用要求（評者も同様の点に着目したことがある）などは、まさしくこの例である。また式目解釈の「解」（らしきもの）が、幕府と当事者との折衝の過程で徐々に定まっていくなされた渡邊の見解（第二部二）は、今後実証を進めるに値する魅力的な仮説である。

そもそも鎌倉幕府訴訟研究は伝統的に、幕府による「上から」の法制度整備・改革の動きを中心に検討され、政治史との密接な連関の中で論じられてきた節があった。しかし本書のように、訴訟当事者が「下から」幕府法制度を利活用し変容させていく側面をも検討することで、従来とは異なる幕府像を描くことすら可能になると、評者は考えている。

以上梗概した如く、本書は初学者の研究史理解、専門研究者の研究推進の双方に裨益するところ大である。かかる書の刊行を悦ぶと同時に、本書が多くの読者を得ることを願う。

（小松原瑞基）

大月康弘著

『Eーロッパ史』

——拡大と統合の力学——

（岩波新書 2003）

岩波書店 二〇二四・一刊

B 40 二六四頁 一〇〇〇円

本書は、一九世紀以降現代に至るまで蓄積されてきた「国民国家」を単位とする各国史の集合としての「ヨーロッパ史」を、歴史の規定原理となってきた思想や文化を軸に改めて描き直すものである。そうした思想・文化の根源は古代末期の地中海東方とりわけビザンツ帝国における皇帝の統治方法とその動力となるキリスト教思想に見出される。本書全体の構成を簡単にではあるが紹介したい。

本書は全五章と前後に付された「はじめに」「おわりに」から成る。第一章「大帝を動かす（力）―伏流水」では、「大帝」と呼称される複数の皇帝たちの業績を追い、古代ローマ帝国の枠組みが解体されていく四世紀以降のいわゆる古代末期においてこうした皇帝の営為がいかに歴史を動かした

かを詳らかにする。そして、かかる「大帝」たちを突き動かした「力」は「シビュラの預言書」のような当時広く普及していた黙示的文学によって浸透していた終末思想・神の救済への期待だった可能性を指摘する。続く第二章「終末と救済の時間意識―動力」は、こうした黙示的文学に依る行動選択が「大帝」たちのみならず広く政治的役割を持つ支配層から市井の人々に至るまで共有されていたことを、年代記等の史料に基づいて明らかにする。こうした議論は、五世紀末から六世紀初頭にかけてこの終末と救済が近づいているという世界観が共有される空間的広がりをこそ「ヨーロッパ」と認識すべきであるという視座を提供する。第三章「ヨーロッパ世界の広がり―外延」では、問題の「ヨーロッパ世界」の基層を「キリスト教ローマ帝国」というキーワードで捉え、一〇世紀頃のビザンツ皇帝がキリスト教徒の平和と安寧すなわち「救済の摂理『オイコノミア』」を実現すべき「キリスト教皇帝」としてキリスト教圏全体から盟主と目されていたことが示される。以上を踏まえて、第四章「近代的思想

の誕生―視座」では、一四・一五世紀のイタリヤ・ルネサンスやレコンキスタなど歴史を画すとされる様々な事象の動力が古代末期に萌芽し中世を通じて伏流水となってきた終末論的観念であったこと、一七・一八世紀の王権神授説や商人として「市民」の誕生・発展の背景に「オイコノミア」をめぐる思想があったことなどが鮮明に描き出される。第五章「歴史から現代を見る―俯瞰」及び「おわりに―統合の基層」では、以上のようなキリスト教ローマ帝国を基層として広く捉えた「ヨーロッパ世界」とその歴史のなかに近代への転換から「国民国家」の誕生を経た現代に生きる我々が何を学ぶべきかという視点で、史学的知識を含んだ近現代史が語られる。

以上の通り、本書の内容はビザンツ史・経済史を主な専門とする著者の作と知って手に取る読者の期待を裏切らない。西北ヨーロッパの政治史を軸に語られる「ヨーロッパ史」が主流の本邦において本書が新書の形で上梓されたことは、今後の所謂「世界史」教育にとっても意義深いものと言えらるだろう。

(清野真惟)

黛秋津編

『講義 ウクライナの歴史』

山川出版社 二〇二二・八月
A5 三三〇頁 二〇〇〇円

二〇二二年二月のロシア・ウクライナ戦争勃発を受けて、同年秋から翌年春に朝日カルチャーセンター新宿教室にて、講座「ウクライナの歴史―キエフ・ルーシから現代まで」が開講された。本書はこの、全十一名の研究者による連続講義を書籍化したものである。以下、本書の内容を講義ごとに紹介する。

第一講（黛秋津）は、現在のウクライナ国家の基本情報を述べたうえで、現在ウクライナを形成している領域が辿ってきた歴史の全体像を提示する。以降の講義の内容をよりよく理解するための、導入部としての役割を持つ。

現在のウクライナの地を中心とする最初の国家は、九世紀末に諸公国の連合体として成立したキエフ・ルーシであった。第二講（三浦清美）は、キエフ・ルーシの成立、キリスト教改宗から諸公間の政治的分裂ま

でを、とくにキエフ・ルーシの受容したキリスト教について詳述しながら論じる。続く第三講（小山哲）は、現在ウクライナと呼ばれている地域の大部分がポーランド・リトアニアの勢力下に入るところから、ロシアとオーストリアによって分割・支配されるまでの一四一―一八世紀を扱う。第四講（青島陽子）は、ヨーロッパ東方での覇権確立以後、民族の論理が広まる中で新たな統合方法を模索したロシア、ハプスブルク両帝国と、両帝国の境界を跨いで居住したウクライナ系住民のナシヨナリズムに注目する。第五講（村田優樹）は、それに続く二〇世紀初頭から一九二一年までの時代を扱い、第一次世界大戦とロシア革命による帝国支配の崩壊により近代において初めてのウクライナ独立国家が誕生したものの、革命と大戦後の混乱の中で独立を喪失する過程を説明する。第七講（池田嘉郎）は、ロシア・ウクライナ戦争がロシア史研究に与

えている影響について、これまでの研究動向を踏まえて論じた後に、ソ連邦の構成国の一つであった時代のウクライナの状況を扱う。ソ連解体後のウクライナ政治を取り上げる第十講（松里公孝）は、ウクライナの国家建設が挫折に至った経緯を明らかにする。最後に第十一講（山添博史）が、クリミア併合とドンバス紛争が始まった二〇一四年以降のウクライナ・ロシア関係と今回の戦争を論じる。

このように本書では、今日ウクライナと呼ばれている地域が辿ってきた歴史が逆史的に論じられている。一方で、特定の主題の検討からウクライナ史や現在のウクライナをめぐる状況を論じる講義も含まれている。第六講（鶴見太郎）は、ウクライナ地域のユダヤ人の歴史を扱うことで、他の講義とは別の角度からウクライナの歴史に迫る。さて、ブーチン政権が掲げた戦争目的の一つはウクライナの「非ナチ化」であっ

た。第八講（浜田樹子）は、この主張の背景となり、両国関係悪化の要因の一つにもなってきた、歴史認識をめぐるウクライナとロシアの政治対立を扱う。第九講（高橋沙奈美）は、ウクライナの正教会が複数に分裂した経緯を踏まえ、ロシア・ウクライナ戦争開戦以降に生じたウクライナにおける正教会の問題を解説する。

本書は、専門とする地域・時代・手法が異なる研究者が集まり、それぞれの知識・見解からロシア・ウクライナ戦争の歴史的背景に迫る貴重な一冊である。また、「はじめに」で述べられているとおり、同戦争の終結後（本書刊行から約一年が経過した現在もその時期は見通せないが）も長く読まれるような、ウクライナ史の良書でもある。専門分野にかかわらず、一読を勧めたい。

（吉田眞生子）